【資料】 大学入試研究ジャーナル第 34 号，104-110，2024

高校の探究学習の支援と高大接続入試
――教育学部嶺南地域枠入試の設計と導入――

大久保 貢，田中 幸治，三浦 麻（福井大学）

福井県の嶺南地域の教員の養成を目指すため，嶺南地域教育プログラムを新設した。それに対応するための嶺南地域枠入試を導入し，そして合格者のための入学前教育を行った。その結果，合格者は地元で教員になるという強い思いを持ったことが分かった。このことから嶺南地域枠入試及び入学前教育は教育の一環として高校生の成長の一助になったことが明らかになった。

キーワード：高大接続改革，高大接続入試，探究学習，地域枠，多面的評価

1 はじめに

福井県の嶺南地域の次代を担う教員の養成推進を目指すため，福井大学教育学部と県，嶺南 6 市町教委は連携協定を締結し，「嶺南地域教育プログラム」を新設した。これは嶺南で教員になることを強く希望する学生を対象に，嶺南の地理歴史や自然，教育について理解を深めてもらい，各市町は体験学習や教育実習の受け入れなどに協力していくプログラムである。このように，地元の教育の実情や課題を在学中から把握してもらい，スムーズに現場に出て行ける仕組みを整えることが狙いである。そして福井大学教育学部は小中学校に嶺南出身の教員が少ない現状を踏まえ，2022 年度入試から「嶺南地域枠」を導入した。なお、文部科学省は 2024 年度から特定の地域で教員を目指す高校生らのために「地域枠」を設ける大学の支援に乗り出した。

本研究は上述のように入学後の教育プログラムを設けて，それに対応するための入試設計を行い，新しい入試を導入した。しかも，合格者のための入学前教育では地元に関する探究的な課題を課すなど，地元の教員への強い思いを持ち続ける入試改革を行った。この点がこれまでにない新しいアプローチからの入試改革である。

2 嶺南地域の教員が定着しない背景

嶺南地域の教員が少ない現状を分析すると，嶺南地域の高校生は福井の大学に進学するよりも関西，中京の大学に進学し，現地の教員採用試験で現地の教員になっている。そのため嶺南地域の教員が定着していないことが分かっている。この地域では福井県の中でも教員が慢性的に不足している。この現状について嶺南 6 市町教委が危機感を抱き，本学教育学部に「嶺南地域教育プログラム」,「嶺南地域枠入試」の要請をした。

3 嶺南地域教育プログラム

下記に嶺南地域教育プログラムの概要等を示した。

【概要】

嶺南地域の時代を担う教員養成のための「4 年間継続学生支援プログラム」，3 年次の教育実習（4 週間）を附属学校（福井市）で実施し，4 年次の教育実習（2 週間）を嶺南地域の小中学校で実施する。

【嶺南地域教育体制】

福井大学教育学部，福井県嶺南教育事務所，敦賀市教育委員会，小浜市教育委員会，美浜町教育委員会，高浜町教育委員会，おおい町教育委員会及び若狭町教育委員会の 8 機関で「嶺南地域教育プログラム」に関する連携協定を締結し，福井大学教育学部と嶺南地域との協力体制が構築されている。

【対象学生】

・嶺南地域枠入試で合格し入学した学生。
・その他の入試区分から入学した学生（希望者）。
・小学校教諭免許及び中学校教諭免許，または小学校教諭免許及び特別支援学校教諭免許の 2 免許の取得を目指すことを前提条件とする。

【修了認定等】

3 年次末に「嶺南地域教育プログラム修了見込証明書」を発行する。福井県での教員採用試験の際に PR として活用できる。また教育実習のための宿泊費などの予算的な補助も行う。

次に，4 年間の学びのうち、嶺南地域教育プログラムを図 1 に示した。このプログラムのように学生への手厚い支援をする背景には，教員養成系国立大学の学生は卒業後, 多くは教員として地域に貢献するものの, 他業界へ流出する学生がいるのも実情である。その地

域の教員に定着してもらうには，学生への手厚い支援を行い，地元で教員になるという強い思いを持ち続けてもらうことが重要である。

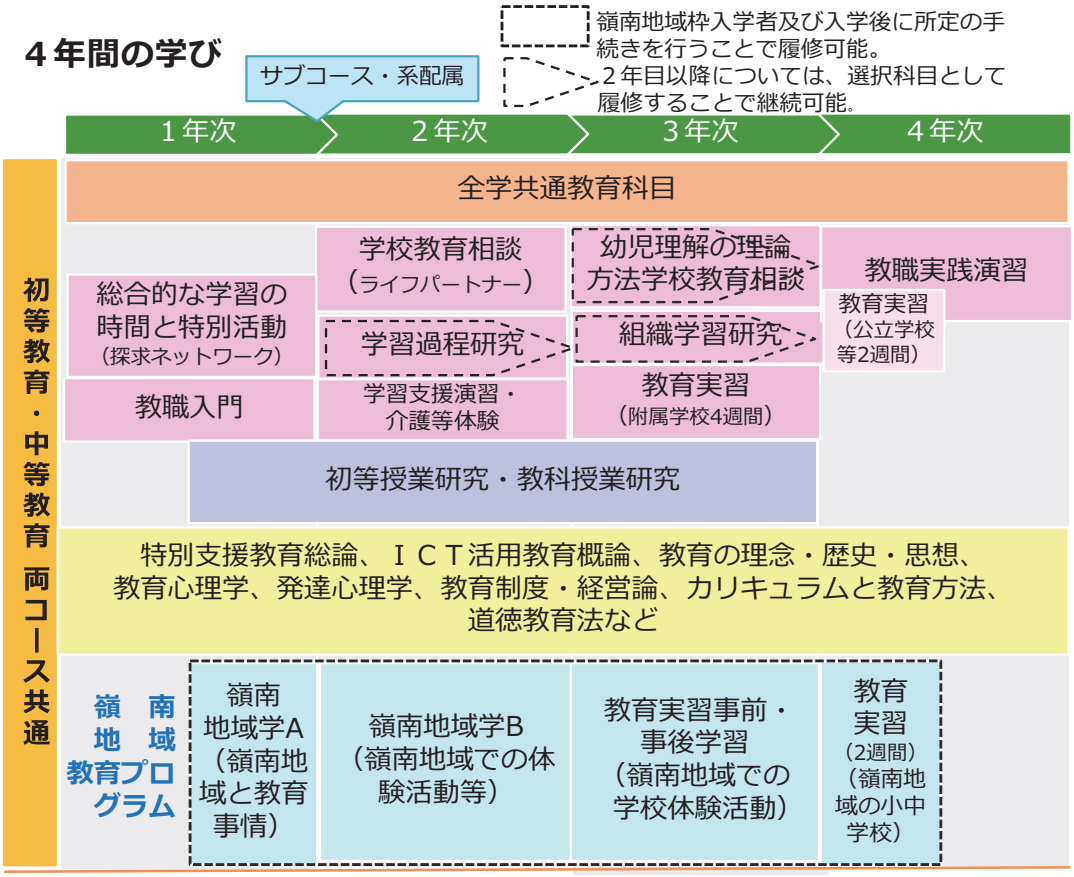

図１ 嶺南地域教育プログラムの４年間の学び

4 嶺南地域枠入試（高大接続入試）の設計

「福井県が目指す引き出す教育[1]，楽しむ教育[2]をリードする教員を育て，将来の日本を担う子ども達の志を育てたい」と嶺南６市町教育委員会の要請を受け，本学教育学部及びアドミッションセンターは入学者選抜の設計に着手した。

福井県が推進している子ども自身の個性に気づかせ，それを伸ばしていくような「引き出す教育」や子ども達が探究心を持って学びを自ら進んで「楽しむ教育」をリードする教員を育成し，しかも入学後の「嶺南地域教育プログラム」を実践する学生を選抜するには，高校時代に取り組みや活動で培った多様な学習成果を多面的に評価する学校推薦型選抜Ⅰ（高大接続入試）の設計が必要と考えた。

選抜方法は，調査書，推薦書，志望理由書，高校時代の取り組みや活動を説明する資料，集団討論及び個人面接（プレゼンテーションを含む。）を総合して選抜することとした。

そこで，出願要件として出身地を問わず嶺南地域の教員となることを強く希望する者とし，出願書類は調査書，推薦書，志望理由書，高校時代の取り組みや活動を説明する資料を提出させた。地域枠入試にも関わらず出身地を問わない理由は，入学後の教育プログラムの受講によりこの地域で教員になるという強い意識を持ってもらうためである。書類審査では高校時代の活動によって培った多様な学習成果を多面的に評価するためルーブリックを開発し評価を行った。そのルーブリックの一部を図２に示した。そして，集団討論の後、プレゼンテーションを実施し，引き続き個人面接を行った。なお，集団討論のテーマは当日提示した。集団討論及び面接（プレゼンテーション）のそれぞれにおいても受験生の能力を多面的に評価するためルーブリックを開発し評価を行った。また面接（プレゼンテーション）のルーブリックを図３に示した。

評価項目	S	A	B	C
主体的である	学校での探究活動等を通し，自らの問いに対して情報を集めて自分の考えをしっかりと持ち，問題解決のために積極的に行動した。	学校での探究活動等を通し，自らの問いに対して情報を集めて自分の考えを持っているが，問題解決のための行動に至ってない。	学校での探究活動等を通し，自らの問いに対して情報を収集しただけで調べ学習になっている。	自らの問いに対して情報を収集せず，自分の考えも持っていない。
教育に強い関心がある	学校教育に幅広い関心と豊かな知識を有している。また学校教育に対する多面的な考え方を持って，教育問題の筋道を見出だそうとする姿勢が大いに見られる。	学校教育に幅広い関心と豊かな知識を有している。また学校教育に対する多面的な考え方を持って，教育問題の筋道を見出だそうとする姿勢が垣間見える。	学校教育に一定の関心と知識を有しているが，それらに対する多面的な考え方を有しておらず，自分の意見を述べることに留まっている。	学校教育への関心・知識が乏しく，また自らの考え方も有していない。
地域・社会の諸課題への取り組みに積極的である	地域社会の諸課題に関する情報を集め，それに対して自分の考えを持ち，課題解決のために行動・活動をしている。	地域社会の諸課題に関する情報を集め，その課題解決のための自分の考えを持っているが，行動に至ってない。	地域社会の諸課題に関する情報を集めただけである。	地域社会の諸課題に関する情報を集めず，関心を持っていない。

図 2 書類審査用ルーブリック

評価項目	S	A	B	C
コミュニケーション力がある	自分の考えを筋道立てて分かり易く整理して，はっきりとした口調で、聞き手に分かり易く伝えることが出来た。しかも聞き手との言葉のキャッチボールが上手く出来た。	自分の考えを筋道立てて分かり易く整理して，はっきりとした口調で，聞き手に分かり易く伝えることが出来た。	自分の考えを筋道立てて分かり易く整理しているため，曖昧な口調ながらも聞き手に分かり易く伝えることが出来た。	自分の考えを筋道立てて分かり易く整理することが出来ないため，聞き手に分かり易く伝えることが出来なかった。
地域・社会の諸課題への取り組みに積極的である	地域社会の諸課題に関する情報を集め，それに対して自分の考えを持ち，課題解決のために行動・活動をしている。	地域社会の諸課題に関する情報を集め，その課題解決のための自分の考えを持っているが，行動に至ってない。	地域社会の諸課題に関する情報を集めただけである。	地域社会の諸課題に関する情報を集めず，関心を持っていない。

図 3 面接（プレゼンテーション）用ルーブリック

図４ 嶺南地域枠入試のオープンキャンパスのチラシ

5 嶺南地域枠入試（高大接続入試）の実施結果

5.1 入試広報

令和４年度入試から実施した嶺南地域枠入試は本学では初めて導入した入試であるため，嶺南地域枠入試オープンキャンパスのチラシを作成して県内高校に広報を行い，オンラインでオープンキャンパスを実施した。令和４年２月には県内嶺南から 26 名，令和５年２月には，県内嶺南から 30 名、嶺北から２名の参加者があった。その嶺南地域枠入試オープンキャンパスのチラシを図４に示した。

5.2 志願状況及び合格状況

令和４年度入試，令和５年度入試の志願状況及び合格状況を表１に示した。

表１ 志願状況及び合格状況（ ）の数字は女子で内数

年度入試	募集人員	志願者数	合格者数
令和４年度	10	23（14）	10（8）
令和５年度	10	14　（7）	11（7）

２年連続で合格者の半数以上が女子で占めていることに関して，高校教員に質問したところ今の高校教育では男子生徒より女子生徒の方が探究学習した結果を相手に丁寧に伝えようとする力が強いとの指摘を受けた。また，本学において高校時代の活動についてプレゼンテーションを課するある学部の高大接続入試では最終合格者の女子の比率が高い傾向であることも上記の理由が考えられる。

また導入初年次より２年目の志願者数が減少したことは下記の理由が考えられる。本入試は上述のとおり高校での活動で培った多様な成果を評価する入試である。初年次に本入試の主旨を理解せず受験し不合格者を出した高校が本入試を理解したため，２年目ではその高校からの志願者が減少したものと考えられる。

5.3 高校時代に取り組んだ活動及びテーマ

志願者が高校時代に取り組んだ活動及びテーマを表２に示した。この表から分かるように地元福井県の高校では積極的に探究学習を実践している。本学ではこの探究学習で行き詰った時にコンサルテーションを行い地元の高校をサポートしている。また高校での中間成果発表会や最終成果発表会での助言も行っている。さらに「福井プレカレッジ」と称して高校生を大学に招いて探究活動を実践させるなど探究学習の支援を行っている。

表２ 高校時代に取り組んだ活動及びテーマ

受験生	活動	活動テーマ
A	探究活動	地元の保育者・幼稚園教諭の現状調査
	ガイド活動	「敦賀ムゼウム」のガイド
B	探究活動	昔の教育と現代の教育の違い
	探究活動	「福井プレカレッジ」参加（大学研究室にて探究学習）
C	探究活動	ペットボトル ロケットの翼による飛行距離の変化
	探究活動	マスクと脈拍・血圧の変化の研究
D	探究活動	防災意識を高めるためには
	探究活動	学校に多様性が認められていないのでは？
E	探究活動	LED ライトの色を使った室内栽培
	探究活動	プロテインづくりで地域食材の PR
	探究活動	「福井プレカレッジ」参加（大学研究室にて探究学習）
F	探究活動	女性が働きやすい環境の実現
	探究活動	「福井プレカレッジ」参加（大学研究室にて探究学習）

5.4 嶺南地域枠入試（高大接続入試）の合格者の感想

合格者に嶺南地域枠入試（高大接続入試）について感想を調査した結果を下記に示した。この感想は次に示す入学前教育の振り返りの時に聞き取り調査したも

のである。

・この入試で不合格になっても，必ず教師を目指す気持ちが強くなった。私の心に火をつけた。将来に繋がる入試になった。
・自分の軸を見つけることが出来た入試だった。成長する手がかりになったと思う。
・「教師になってやる」という心に火をつけた。この入試に落ちても教師になるために頑張る。
・高校 3 年間でどういう力が付いているか分かり，今後その力でどうするか自分的に勉強になった。
・入試の準備の段階で自分の成長を振り返りになり，この入試に落ちても教師になる！と頑張れた。
・高校時代に頑張ったことを引き出せた。自分にとってプラスになった入試であった。

以上のように本入試に対する合格者の意見として，現在の高校教育に即した入試と好意的に受け止めていることが分かった。そして単なる入試として受験したのでなく，教育の一環として高校生の成長の一助になり，しかも地元の教師になるという強い思いも抱いたことが明らかになった。また本入試は大学入学共通テストを課さない学校推薦型選抜Ⅰのため，入学後の授業についていけるのかどうか心配であるといった今後の入試改善の議論に繋がる意見や感想は全くなかった。その理由は下記のことが考えられる。推薦要件として調査書の全体の学習成績状況が 4.3 以上の者が望ましいと設定したため受験生はその高校のトップクラスの生徒が推薦されたものと考えられる。

6 入学前教育

本学教育学部とアドミッションセンターでは合格者に対して入学までの約 3 か月間を大学で学ぶための準備期間として有意義に過ごしてもらうための入学前教育プログラムを実施した。入学前教育は，オリエンテーション，課題 1，課題 2，課題 3，振り返りから成っている。

【課題 1】は「嶺南地域理解に関する課題」について，合格者を 3 グループに分けてオンラインにてグループ発表を行った。内容，目的，取り組み期間は下記のとおりである。

（内容）

嶺南地域と嶺北地域の比較などを通じて，嶺南地域の課題・特徴等を各自で発見し，個人で調査したことをグループ内で比較してまとめる。

（目的）

・嶺南地域の特徴を理解し，嶺南地域を支える小中高の教員を目指す。
・与えられたテーマのもと，各自及びチームで課題を発見し，チームで課題探究を進められる。
・課題探究の成果を一般市民に分かりやすく伝えられる。

（取り組み期間）

令和 4 年 12 月 24 日～令和 5 年 1 月 30 日で、2 月 9 日にオンラインで成果発表会を行う。

【課題 2】は読解力の課題の作成と添削指導を目的に行った。課題図書として「14 歳からの哲学～考えるための教科書～」を与え小論文を課し，添削指導を行った。

【課題 3】は教育に関する課題の作成と添削指導を目的に行った。課題図書として「窓ぎわのトットちゃん」を与え小論文を課し，添削指導を行った。

3 月下旬に入学前教育プログラムに対する反省会をオンラインにて実施した。この振り返りで入学前教育プログラムの感想を下記に示した。

・大学に入学してから母校に教員となって戻りたいという気持ちが強くなりました。この夢を叶えるためにも嶺南地域学をはじめとした専門教育を身につけ，様々な人と協働・探究していきたいです。
・課題 1 の取り組みにより，嶺南地域の文化・歴史を理解でき，また，この地域での課題（人口流出等）を理解することが出来て良かった。
・課題 1 で他の高校の生徒と一緒に探究活動を実践したことにより，自分と違った視点で解決を図り，自分よりも主体性，協働性，対話力が優れていることが気づき大変勉強になった。
・課題 1 を実践して嶺南には私の知らないことがまだまだあることを知った。これからの 4 年間をとおして嶺南地域の課題や魅力を学んでいく中で、嶺南の題材をどのように使いどのように伝えれば子供たちにとって有意義な学びになるかを考えていきたい。
・嶺南地域の良さや課題などをこのプログラムを学んでいくことで，自分自身が嶺南に愛着を持ち，生徒に嶺南を好きになってもらえるような授業をつくっていきたい。

以上のように，高校時代に探究活動を主体的に実践した経験を基に入学前教育（課題 1）での探究活動を実施することに対し，全員が抵抗なく，むしろ主体的・

積極的に取り組んでいた。これは福井県の高校教育において探究学習を積極的に取り組んでいる成果と考える。そして，この入学前教育により地元の教員になるという強い思いを持ち続けてもらう取組として有効であった。

7 嶺南地域枠入試（高大接続入試）におけるルーブリックの妥当性の検証

嶺南地域枠入試（高大接続入試）では，受験生の高校時代の取り組みや活動で培った多様な能力を多面的に評価するためルーブリックを開発し評価を行った。多面的に評価する入試については，常にルーブリックによる評価の妥当性を検証し，選抜方法の改善を図らなければならない。このような観点から令和４年度入試入学生の入試成績と入学後の学業成績[3)]（1 年間）との相関を調査した。ここでは，書類審査の入試成績，プレゼンテーション / 面接の入試成績，総合入試成績と入学後の学業成績の関係を図５～図７に示した。

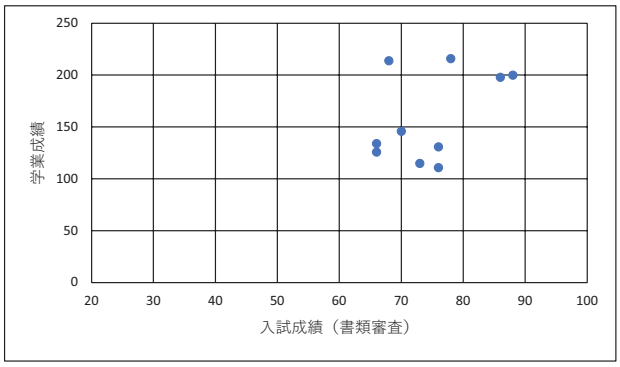

図５ 入試成績（書類審査）と入学後の学業成績

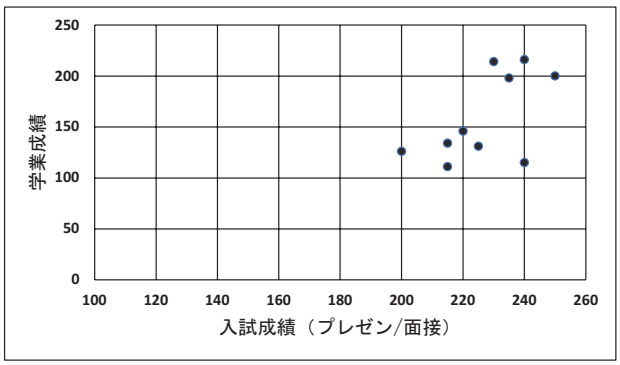

図６ 入試成績（プレゼン/ 面接）と入学後の学業成績

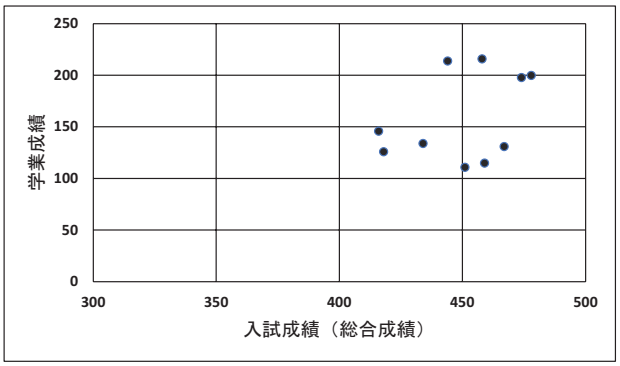

図７ 入試成績（総合成績）と入学後の学業成績

図５～図７より，それぞれの相関係数は書類審査：0.48，プレゼン / 面接：0.61，総合成績：0.38 であった。なお，集団討論の評価結果と学業成績の相関は認められなかった。嶺南地域枠入試（高大接続入試）におけるルーブリック評価の妥当性を検証した結果，試験科目の中の書類審査とプレゼン / 面接については入学後の学業成績と正の相関関係が見られた。

今後，嶺南地域枠入試（高大接続入試）入学生の入学後の大学教育にスムーズに接続し活躍しているかを追跡したい。

8 まとめ

医師偏在の解消が目的の医学部の地域枠入試では奨学金を貸与する制度があり，一定の効果を上げている。しかし，教育学部または教員養成系の場合はそこまで強力に後押しする仕組みはない。そこで，鍵を握るのが地元への思いを持ち続けてもらうための取組が必要と考えた。このような観点から入学後の嶺南地域教育プログラムを新設し，それに対応する嶺南地域枠入試（高大接続入試）の設計を行い，入試を実施した。そして，入学前教育として嶺南地域の理解に関する課題をグループで探究学習を行った。その結果，この入試を受験した生徒の感想から入試が受験生にとって教育の一環として高校生の成長の一助になったことが分かった。また入学前教育の実施でも地元の教員への強い意志を根付かせたことが出来た。そしてこの入試で多面的に評価したルーブリックの妥当性を検証した結果，書類審査とプレゼン / 面接については入学後の学業成績と正の相関関係を有することが分かった。

以上のことより，本研究が地元からの教員志願者の確保に悩んでいる大学にとって問題解決の一助になることを期待する。

注

1）福井県の「引き出す教育」について

子ども自身の個性に気づかせ，それを伸ばしていくような「引き出す教育」で，施策例として次のような取り組みがあげられる。

・ふくい理数グランプリの開催
・高校生の留学支援，グローバルキャンプ
・高校生の起業家精神の育成
・特別支援教育の推進　　等

2）福井県の「楽しむ教育」について

教員がすべてを教え込むのでなく，子どもたちが知的好奇心や探究心を持って学びを自ら進んで「楽しむ教育」で，施策例として次のような取り組みがあげられる。

・探究的な学習，体験学習の推進
・タブレット端末等の ICT 活用
・読書活動の充実
・通うのが楽しい魅力ある学校づくり　　等

3）学業成績について

学業成績は下記の計算式より求めた数値である。

学業成績＝「秀」の単位数 x4+「優」の単位数 x3+「良」の単位数 x2+「可」の単位数 x1

参考文献

文部科学省（2023）.「教師を取り巻く環境整備についての緊急的に取り組むべき施策（提言）」中央教育審議会特別部会 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/099/mext_01561.html（2023 年 8 月 28 日）.

大久保貢（2018）.「『探究力』に対するルーブリック評価の開発」『大学入試研究ジャーナル』28, 53-59.

大久保貢・中切正人・田中幸治（2022）.「高大接続・教育委員会と連携した地元高校生の人材確保「福井プレカレッジ」への支援と入学者確保」『大学入試研究ジャーナル』32, 17-22.

課題図書：「14 歳からの哲学～考えるための教科書～」池田晶子（トランスビュー）.

課題図書:「窓ぎわのトットちゃん」黒柳徹子（講談社文庫）.